

宮崎県気候変動適応センター通信 第31号

IPCC 第6次評価報告書について～地球温暖化の原因と気温の現状・将来予測～

2021年8月、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の第1作業部会(自然科学的根拠)から第6次評価報告書が発表されました。今回から2回にわたって、その概要についてお知らせします。

※IPCCとは、国際的な専門家で作る、地球温暖化についての科学的な研究の収集、整理のための政府間機構。

地球温暖化の原因

- 温暖化の原因について、第6次報告書では人間活動が大気・海洋及び陸域を温暖化させてきたことは「**疑う余地がない**」とさらに踏み込んだ断定的な表現となりました。
- 大気中の二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素は、過去80年間で前例のない水準まで増加しています。

気温の現状と将来予測

- 世界平均気温(2011～2020年)は、工業化前と比べて**約1.09°C上昇**したとしています。この観測地は過去10万年間で最も温暖だった数百年間の推定気温と比べても**前例のないものである**とされています。また、陸域では海面付近よりも1.4～1.7倍の速度で気温が上昇しています。
- 陸域のほとんどで1950年代以降に大雨の頻度と強度が増加し、強い台風の発生割合は過去40年間で増加しています。また、世界の平均海面水位は1901～2018年の間に約0.20m上昇しています。
- 気温の将来予測について、**21世紀半ばに実質CO₂排出ゼロが実現する最善シナリオにおいても、2021～2040年の平均の気温上昇は1.5°Cに達する可能性がある**としています。また、**化石燃料依存型の発展の下で気候政策を導入しない、最大排出量のシナリオにおいては、今世紀末までに3.3°C～5.7°Cまで上昇する可能性がある**と予測しています。

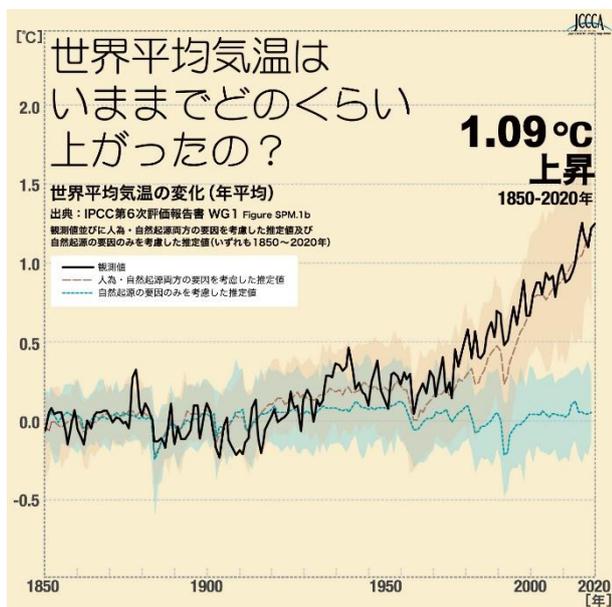
JCCCA

温暖化と人間活動の影響の関係について これまでの報告書における表現の変化

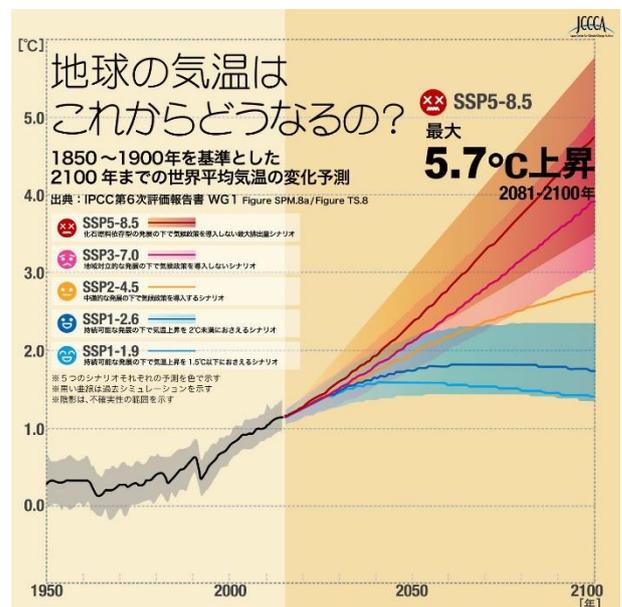
第1次報告書 First Assessment Report: 1990	1990年	「気温上昇を生じさせるだろう」 人為起源の温室効果ガスは気候変化を生じさせる恐れがある。
第2次報告書 Second Assessment Report: 1995	1995年	「影響が地球の気候に表れている」 識別可能な人為的影響が全球の気候に表れている。
第3次報告書 Third Assessment Report: 2001	2001年	「可能性が高い(66%以上)」 過去50年に観測された温暖化の大部分は、温室効果ガスの濃度の増加によるものだった可能性が高い
第4次報告書 Fourth Assessment Report: 2007	2007年	「可能性が非常に高い(90%以上)」 20世紀半ば以降の温暖化のほとんどは、人為起源の温室効果ガス濃度の増加による可能性が非常に高い。
第5次報告書 Fifth Assessment Report: 2013	2013年	「可能性がきわめて高い(95%以上)」 20世紀半ば以降の温暖化の主要因は、人間活動の可能性が極めて高い。
第6次報告書 Sixth Assessment Report: 2021	2021年	「疑う余地がない」 人間の影響が大気・海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない。

出典: IPCC第6次評価報告書

出典: 全国地球温暖化防止活動推進センターウェブサイト (<https://www.jccca.org/>)



出典: 全国地球温暖化防止活動推進センターウェブサイト (<https://www.jccca.org/>)



出典: 全国地球温暖化防止活動推進センターウェブサイト (<https://www.jccca.org/>)

宮崎県気候変動適応センター

事務局: 宮崎県環境森林部環境森林課 電話: 0985-26-7084 E-mail: kankyoshinrin@pref.miyazaki.lg.jp